

## ポートフォリオからアクティブ・ラーニングへ向けた教育活動

### Educational Development: From Portfolio to Active Learning

鬼 島 宏\*、田 中 正 弘\*\*、  
藤 崎 浩 幸\*\*\*、中 根 明 夫\*\*\*\*

Hiroshi KIJIMA, Masahiro TANAKA, Hiroyuki FUJISAKI, Akio NAKANE

#### 【要 旨】

高等教育である大学においては「学生中心の教育」や「自学自習テュートリアル」の実質的な導入が議論され、その実現を目指したFaculty Development (FD) 活動が展開されている。「ティーチング・ポートフォリオを活用したFD活動の展開」の一環で創成された「教育者総覧」は、弘前大学版Teaching Portfolioとして位置付けられ、教育改善の一助なりうる発展性が示された。一方、教えること (Teaching) と学ぶこと (Learning) とは表裏一体であることを認識し、学生と教員との間で良好なパートナーシップを構築することが重要である。つまり、学生中心の教育 (Learner-Centered Classroom) を実践することで、教員・学生間の相互理解を深め、教員の生き様を親身に伝えることで、学生の中で自学自習による効果的な生涯教育 (Effective Life-Long Learning) の大切さを萌芽させることが不可欠である。これを実現させるためには、生涯学習を前提とした大学における能動的学修 (アクティブ・ラーニング Active Learning) のための教育活動構築を検討することが急務である。

#### 【はじめに】

教育研究水準の向上を図り、人材育成と社会貢献を行うことが、高等教育機関として大学に求められている<sup>1)</sup>。平成17年に発表された中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」では、高等教育の質の保証の仕組みとして、(a) 事前・事後の評価の適切な役割分担と協調を確保こと、(b) 個々の高等教育機関が質の維持・向上を図るためには、自己点検・評価がまずもって大切である、の2点が述べられている。さらに平成24年中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学～」では、学生の主体的な学修時間の実質的増加・確保に加えて、生涯学習を前提とした能動的学修 (Active Learning アクティブ・ラーニング: 「学修」と表現) への転換の必要性が指摘され、教員一人一人に教育内容と方法のさらなる工夫が求められるこ

---

\* 弘前大学大学院医学研究科

Hirosaki University Graduate School of Medicine

\*\* 弘前大学21世紀教育センター

Centre for 21<sup>st</sup> Century Education, Hirosaki University

\*\*\* 弘前大学農学生命科学部

Faculty of Agriculture and Life Science, Hirosaki University

\*\*\*\* 弘前大学理事 (教育担当)・副学長

Executive Director (Academic Affairs) and Vice President, Hirosaki University

ととなった。

本稿では、全学的な Faculty Development (FD) 活動の緒となった Recording Teaching Accomplishment Institute at Dalhousie University, 「ティーチング・ポートフォリオを活用したFD活動の展開」の実践の一環としての教育者総覧作成とFDシンポジウム・FDワークショップ、さらには今後のアクティブ・ラーニングに向けた教育活動の構築を検討する。

## 【ティーチング・ポートフォリオの導入】

Teaching Portfolio (ティーチング・ポートフォリオ = Teaching Dossier) とは、カナダをはじめ欧米で普及しつつある書類で、大学教員が授業を振り返り、その成果を自己評価しながら、Teaching Philosophy (教育哲学) などを確立して、授業改善へと結びつけるために用いられる。(表1・表2)<sup>2)</sup>

表1. Teaching Portfolio/Dossier の構成

1. Summary of Teaching Responsibilities
2. Reflective Statement on Teaching Philosophy, Practices, and Goals
3. Course Development and Modification
4. Development of Teaching Materials
5. Products of Good Teaching
6. Description of Steps Taken to Evaluate and Improve Your Teaching
7. Presentations, Research, and Publications on Teaching
8. Administrative and Committee Work Related to Teaching
9. Information from Students
10. Information from Colleagues
11. Information from Other Sources

Centre for Learning and Teaching, Dalhousie University, Halifax, Nova Scotia, Canada

表2. Teaching Philosophy の定義と意義

### *Definition of Teaching Philosophy*

A teaching philosophy statement is a systematic and critical rationale that focuses on the important components defining effective teaching and learning in a particular discipline and/or institution.

### *Purpose of Teaching Philosophy*

For yourself:

Self-reflection

Provide a record of teaching development over time

Provide a rationale for your teaching

Articulate ideas about teaching with others

For the evaluator of your dossier:

What do you do? Why do you do it? In what context?

How are these elements congruent with one another?

Centre for Learning and Teaching, Dalhousie University, Halifax, Nova Scotia, Canada

弘前大学では、授業改善計画の一環として「ティーチング・ポートフォリオの導入と活用」が掲げられ、平成17年度から全学的なFD活動を推進するため、教員を海外に派遣して高等教育に関する先進大学の活動状況調査を開始するとともに、平成18年度からは教育・学生会（現、教育委員会）の下で Teaching Portfolio に関する研究プロジェクト・チームが立ち上げられた。このプロジェクトの1つの目標は、Teaching Portfolioの専門家としての資格認定研修を受けることとして、実際に平成18年および平成19年の2回で計8名の教員が Centre for Learning and Teaching, Dalhousie Universityにて Recording Teaching Accomplishment Institute: A five-day institute to develop individual teaching dossiers の資格認定を修めた。

Teaching Portfolioは、従来からの教員自己評価報告書の内容に加えて、(a) Teaching Philosophy（教育哲学）、(b) 授業・教育材料の工夫と改善、(c) 将来の教育目標といった項目が加わり、これらの記載に相当の力が注がれることとなる。つまり教育実績をふまえ、教員として将来のあり方を考えることとなるため、Teaching Portfolioは各教員の特色が表現される「前向き自己評価」といえ、詳細な資料を含むため量的には概ねA4用紙10ページ前後（6-12ページ）で構成される。<sup>2) 3) 4)</sup> Teaching Portfolioは、欧米では教員の採用や昇進を判断する教育評価のツールとして活用されているが、同様の様式を文化的・歴史的な差異がある日本に導入するには慎重が必要であると判断された。このため、弘前大学版 Teaching Portfolioとして表3のごとく6項目を有する「教育者総覧」が創成された。全教員を対象に記載してもらうために、段階的導入が決定され、平成19年度は(1) 授業に臨む姿勢 (Teaching Philosophyに相当する内容)、(2) 教育活動自己評価、(3) 授業改善のための研修活動等の3項目として、平成20年度に残りの3項目を加えて現在は計6項目を公開している。<sup>5)</sup>

表3. 教育者総覧 Applications to Hirosaki University

- 目的：教員が教育のプロとしての自覚を持ち、授業内容や教育方法の改善に努め、教育能力の向上を図る。
- 弘前大学版 Teaching Portfolio として、教員による教育活動全般に関する自己評価申告記録を記す。
- 教育者総覧自体を定着・発展させ、教員がお互いを高める検証材料として活用する (Discuss with colleagues)。

#### 教育者総覧の6項目

1. 授業に臨む姿勢（学生へのメッセージを含む）
2. 教育活動自己評価（学生の授業評価を資料）
3. 授業改善のための研修活動等（FD参加等の実績）
4. 授業の概要と具体的な達成目標
5. これまでに設定した教育目標に対する達成度
6. 今後の教育目標（担当授業と関連した具体的な達成目標）とその方策等

## 【ティーチング・ポートフォリオを活用したFD活動の展開】

### (1) FDシンポジウム

弘前大学では、平成20年度～平成24年度の5年間、文部科学省特別教育研究経費を基盤として「ティーチング・ポートフォリオを活用したFD活動の展開」を推進することとなった。このFD活動の主軸として、毎年秋期（11月～12月）に行われているFDシンポジウム（平成21年までは、FD講演会）およびFDワークショップ（秋期）が挙げられる。

当初のFD講演会の内容は、FD活動の実践やTeaching Portfolio導入を目指した内容が多く（表4、表5）、平成20年度はDr. Lynn Taylor（Dalhousie University, Canada）、平成21年度はDr. John Zubizarreta（Columbia Collage, USA）とFD活動がすでに軌道に乗っている北米から講師が招聘された。一方、平成22年度は、国内の大学でのPortfolio実践例や、弘前大学における教育改革の実績を踏まえて今後いかに展開してゆくかといった具体的な内容と情報交換の場となっている。平成23年度は、本格的なTeaching Portfolioの作成の試みに加えて、Learning Portfolioの萌芽となる取組が取り上げられた（表6、表7）。

表4．平成20年度弘前大学FD講演会

1. 【講演】	演】 Educational Development (ED): Redefining the Scope and Meaning of Faculty Development (FD) (Lynn Taylor, Centre for Learning and Teaching, Dalhousie University, Halifax, Nova Scotia, Canada)
2. 【基調報告1】	世界各国大学のFD/EDの現状報告 (土持ゲーリー法一、21世紀教育センター)
3. 【基調報告2】	“2008 POD Network/NCSPD Conference, Reno, Nevada” から得たこと (鬼島 宏、医学研究科)

表5．平成21年度弘前大学FD講演会

1. 【講演】	演】 Enhancing Student Learning with the Learning Portfolio (John Zubizarreta, Columbia Collage, South Carolina, USA)
2. 【基調報告1】	FDの歴史的変遷とカナダ、オーストラリアにおけるFDの取組 (土持ゲーリー法一、21世紀教育センター)
3. 【基調報告2】	第34回POD年次大会に参加して (中野京子、保健学研究科)
4. 【基調報告3】	大学における学生・教員間のパートナーシップ構築をめざして (鬼島 宏、医学研究科)

表6．平成22年度弘前大学FDシンポジウム

1. 【講演】	佐賀大学におけるポートフォリオ活用の試み－教育改善のためのティーチング・ポートフォリオ導入とその展開－（皆本晃弥、佐賀大学高等教育開発センター）
2. 【講演】	岐阜大学医学部におけるポートフォリオ活用の試み－1年次地域体験実習と5年次医療面接実習における振り返りの促進と教員からのフィードバック－（鈴木康之、岐阜大学医学部医学教育開発研究センター）
3. 【弘前大学の取り組み】	A) 全学（神田健策、教育・学生担当理事） B) 人文学部（今井正浩） C) 教育学部（郡千寿子） D) 医学研究科（鬼島 宏） E) 保健学研究科（野田美保子） F) 理工学研究科（伊東俊司） G) 農学生命科学部（吉田 孝） H) 学生の立場から（岩崎夏千、講演時：人文学部4年）
4. 【海外派遣報告】	A) ICED (International Consortium for Educational Development, Spain)（長南幸安、教育学部） B) POD (Professional and Organizational Development Network, USA)（小野寺進、人文学部；小山内隆生、保健学研究科） C) SEDA (Staff and Educational Development Association, UK)（田中正弘、21世紀教育センター；上松 一、人文学部）

表 7. 平成23年度弘前大学FDシンポジウム

- 
1. 【弘前大学での本格的なティーチング・ポートフォリオ作成の試み】
    - A) 本格的ティーチング・ポートフォリオの導入（神田健策、教育・学生担当理事）
    - B) 本格的ティーチング・ポートフォリオの作成（長南幸安、教育学部；小山内隆生、保健学研究科）
    - C) オランダの事例－ティーチング・ポートフォリオの活用（田中正弘、21世紀教育センター）
  2. 【弘前大学での本格的なラーニング・ポートフォリオの萌芽となる取組】
    - A) 教育学部のラーニング・ポートフォリオ（佐藤三三）
    - B) 医学部のラーニング・ポートフォリオ（鬼島 宏）
- 

## (2) 高等教育開発ネットワークへの参加

米国・英国などにおける高等教育開発ネットワーク等にも積極的に参加し、その成果も適宜報告され、導入が行われてきた。そのひとつが、全米ファカルティ・デベロップメント担当者の高等教育による教授・学習支援に関する専門職的・組織的開発ネットワーク・カンファレンス POD Network Conference (The Professional and Organizational Development Network in Higher Education, (POD Network Conference)) で、主に 4 年制大学 (university) のスタッフにより構成される The Professional and Organizational Development Network in Higher Education, POD Network と、2 年制大学 (college) のスタッフを対象とした The National Council for Staff, Program and Organizational Development, NCSPOD との合同の年次大会 (POD Network/NCSPOD Conference) である。<sup>6) 7)</sup> 我々が参加した POD Network Conference 2008 の目的は、(1) 教授・学習支援に関する開発法のあり方、(2) Teaching Portfolio や Academic Portfolio などの教育に関するポートフォリオの導入とその効果的な用い方、<sup>8)</sup> (3) 授業改善への具体的な取組みや学生中心の授業展開、<sup>9)</sup> の 3 点であった (表 8)。一方、英国における高等教育開発のネットワークは Staff and Educational Development Association (SEDA) であり、2009 年次大会は Changing Educational Development: New Ideas, New Approaches, New Contexts を主題として開催された (表 9)。<sup>10) 11)</sup> 米国・英国においての大学教育のあり方は、学問分野と同様で多種多様であり、一定の基準では計りえない要素が相当に含まれているものの、POD, SEDA いずれのカンファレンスでも、講師は自校での実践を紹介しつつ、参加者と情報交換を行うことで、相互に教育レベルを高めようとする努力が感じられた。高等教育開発ネットワークへの参加を含む海外派遣の成果は、該当年の FD シンポジウム・FD 講演会で学内にフィードバックされている。(表 4～表 7)

表 8. Aims of POD Network Conference 2008

---

The Professional and Organizational Development (POD) Network & The National Council for Staff, Program and Organizational Development (NCSPOD) 2008, USA

- I. Faculty Development, Professional Development
- II. Teaching Portfolio, Academic Portfolio
- III. Course Development and Modification, Learner-Centered Classroom  
Practical Suggestions for Modeling Interactive Instruction

---

表 9. Aims of SEDA Conference 2009

---

14th Annual Staff and Educational Development Association (SEDA) Conference 2009: Changing Educational Development: New Ideas, New Approaches, New Contexts

1. Learning for Life: from pedagogy to partnership
2. Infinity and Beyond: the adventure of learning
3. The Importance of the Learner Voice in 21st Century Higher Education

---



### (3) FDワークショップ

秋期FDワークショップは、毎年11月～12月の週末に1泊2日ないし1日（日帰り）で行われている。「ティーチング・ポートフォリオを活用したFD活動の展開」に基づく当初の秋期ワークショップ（平成20～21年度）は、参加者が弘前大学版 Teaching Portfolio を記載することを目標のひとつとしていた。このため、作業も各自の Teaching Philosophy（教育哲学）を確立して、記載することに精力を注がれた。ワークショップ内での講演は、前述のFD講演会と合わせて北米から招聘された講師による Teaching Portfolio に関連した講演も含まれていた（表10、表11）。

表10. 平成20年度弘前大学秋期FDワークショップ（1泊2日）

---

テーマ：日本語によるティーチング・ポートフォリオの作成
【第1日目午前】
1. 講演 “The Teaching Philosophy Statement: The Heart of Your Teaching Dossier” (Lynn Taylor, Centre for Learning and Teaching, Dalhousie University, Halifax, Nova Scotia, Canada)
【第1日目午後】
2. 研修オリエンテーション「メンターとメンタリングについて」 (土持ゲーリー法一、21世紀教育センター)
3. セッションⅠ（ティーチング・ポートフォリオ作成）
4. 全体会議Ⅰ（司会：土持ゲーリー法一、21世紀教育センター）
【夕食・懇親会】
【第2日目午前】
5. セッションⅡ（ティーチング・ポートフォリオ作成）
6. メンター報告・意見交換
7. 全体会議Ⅱ（司会：土持ゲーリー法一、21世紀教育センター）

---

表11. 平成21年度弘前大学秋期FDワークショップ（1泊2日）

---

テーマ：ティーチング・ポートフォリオとメンターの役割
【第1日目午前】
1. 概説「文部科学省特別教育研究経費による『ティーチング・ポートフォリオを活用したFD活動の展開』について」(土持ゲーリー法一、21世紀教育センター)
2. 講演 “The Teaching Portfolio: Reflective Practice & Mentoring for Improvement and Assessment of Teaching” (John Zubizarreta, Columbia College, South Carolina, USA)
【第1日目午後】
3. 研修オリエンテーション（メンタリングについて）(土持ゲーリー法一、21世紀教育センター)
4. セッションⅠ（教育者総覧作成）
5. 全体会議Ⅰ（司会：土持ゲーリー法一、21世紀教育センター）
【夕食・懇親会】
【第2日目午前】
6. セッションⅡ（教育者総覧作成）
7. メンター報告・意見交換
8. 全体会議Ⅱ（司会：土持ゲーリー法一、21世紀教育センター）

---

一方、平成22～23年度のFDワークショップは、参加者が弘前大学における教育改革を十分に理解して、教育者総覧（弘前大学版 Teaching Portfolio）を充実させることを大きな目的としている（表12）。このため、参加者がお互いの教育者総覧を討議することで、その内容に磨きをかけ、講演も教育改革や教育者総覧に関連する内容となっている（表13）。

表12. 平成22年度弘前大学秋期FDワークショップ（1泊2日）

【第1日目午前】

1. 講演「弘前大学における教育改革の現状と課題」  
（神田健策、教育・学生担当理事）
2. グループ討議Ⅰ
3. 討議内表発表Ⅰ（司会：鬼島 宏、医学研究科）

【第1日目午後】

4. 講演「教育者総覧作成の経緯と各項目の意図」（木村 宣美、人文学部）
5. セッションⅠ（教育者総覧作成）
6. 講演「弘前大学版 Teaching Portfolio の創成－何故、今 Teachingなのか」  
（鬼島 宏、医学研究科）
7. セッションⅡ（教育者総覧作成）

【夕食・懇親会】

【第2日目午前】

8. グループ討議Ⅱ
9. 討議内表発表Ⅱ（司会：田中正弘、21世紀教育センター）
10. 講演「ティーチング・ポートフォリオ導入の試み－他大学の取り組みを参考に」  
（司会：田中正弘、21世紀教育センター）
11. 本格的ティーチング・ポートフォリオ作成進捗状況報告  
（長南幸安、教育学部；小山内隆生、保健学研究科）
12. 全体会議

表13. 平成23年度弘前大学秋期FDワークショップ（日帰り）

【午前】

1. 講演「弘前大学における教育改革の現状と課題」  
（神田健策、教育・学生担当理事）
2. 講演「教育者総覧作成の経緯と各項目の意図」（木村 宣美、人文学部）
3. グループ討議Ⅰ
4. 討議内表発表Ⅰ（司会：田中正弘、21世紀教育センター）

【昼食】

【午後】

5. グループ討議Ⅱ
6. 討議内表発表Ⅱ（司会：田中正弘、21世紀教育センター）
7. 講演「弘前大学版 Teaching Portfolio の創成に向けて－教育の質保証と学習支援に向けた取り組み－」  
（鬼島 宏、医学研究科）
8. グループ討議Ⅲ
9. 討議内表発表Ⅲ（司会：田中正弘、21世紀教育センター）
10. 全体会議

## 【アクティブ・ラーニングへ向けた取り組み】

### (1) 平成24年度FDシンポジウム

文部科学省特別教育研究経費を基盤とした「ティーチング・ポートフォリオを活用したFD活動の展開」は、平成24年度に5年目を迎え、最終年度として総括の時期に至ったため、今年度のFDシンポジウムでは、改めてTeaching Portfolioの活用と今後の展開を問うこととなった（表14）。第一部では、喜久里氏（文部科学省高等教育局）より「大学教育の一層の進展に寄せて」と題した基調講演が行われた。平成10年中教審答申「21世紀の大学像と今後の改革方針について」において、教員の教育内容・方法の改善のため、全学的にあるいは学部・学科全体で、それぞれの大学等の理念・目標についての組織的な研究・研修（FD活動）の実施に努める旨が示されて以降、多くの大学でFD活動が行われるようになったと報告された。最近では、大学教育の「出口」保証（学生に何を身に付けさせるか）に向けた取組の強化も命題として加わってきた旨の説明がなされた。次いで、「5年間の総括と今後への展開」の講演では、弘前大学が、平成18年度に教育・学生委員会の下でTeaching Portfolioプロジェクト・チームを立ち上げ、Dalhousie Universityへの教員派遣、さらには「教育者総覧」として結実したとの経緯が説明された。教育者総覧（表3）は、授業改善のための授業実践記録とそれに対する教員の省察として有意義であり、教育者総覧を機会あるごとに更新することは継続的な改善に繋がることが示された。教育者総覧の入力状況は、77.7%（590/759名、平成23年11月）と高い割合であり、授業担当が限定的な附属病院所属の教員を除くと、84.6%（539/637名）と極めて高い執筆率となっていることが呈示された。また、シラバスへのリンクが行われたことで、弘前大学の教員が学生に対してどのような姿勢で教育をしようとし、どのように授業内容の向上と改善に努めようとしているかが、明確になっていると結論付けられた。

表14. 平成24年度弘前大学FDシンポジウム

---

テーマ：ティーチング・ポートフォリオを活用したFD活動の展開（5年の総括）

#### 【第一部】

基調講演「大学教育の一層の進展にむけて」

（喜久里 要、文部科学省高等教育局）

講演「5年間の総括と今後への展開」

（中根明夫、教育担当理事；田中正弘、21世紀教育センター）

#### 【第二部】

特別講演1「アカデミック・ポートフォリオの基本理念」

（土持ゲーリー法一、帝京大学）

特別講演2「新任教員研修でのティーチング・ポートフォリオの活用」

（林 泰子、立命館大学）

#### 【第三部】

総括討論（司会：鬼島 宏、医学研究科、藤崎浩幸、農学生命科学部）

---



第二部では、弘前大学版 Teaching Portfolioとして位置付けられた「教育者総覧」の発展の方向性や有効な活用方法を探索する目的で、2名の講師が招聘された。土持氏（帝京大学）の特別講演「アカデミック・ポートフォリオの基本理念」では、Teaching Portfolioからの発展した様式として（1）教育活動のみでなく、（2）研究活動、（3）社会貢献の3つの役割を統合した、総合的な教員業績システム（アカデミック・ポートフォリオ）の有用性が説明された。3項目といえども、教育活動の部分が最も重要であること、研究活動では自らの研究がその学問分野においてなぜ重要であるのかを専門以外の一般の方にも理解できるように説明しなければならないこと、などが強調された。林氏（立命館大学）の特別講演「新任教員研修でのティーチング・ポートフォリオの活用」では、これから授業担当を始める新任教員が、担当授業等で多忙になる前にポートフォリオをまとめることで、教員としての自覚や大学内での位置付けが明確化する旨が示された。さらに、実践的FDプログラムの開発経緯が示され、FDプログラム修了要件に（1）オンデマンド講義、（2）ワークショップ参加、（3）ティーチング・ポートフォリオ作成・提出が含まれることが説明された。第三部では、上記の講演を踏まえ、Teaching Portfolioの内容（今後の方向性・発展性も含めて）、および具体的な活用などについての総合討論が行われた。



基調講演「大学教育の一層の進展に寄せて」  
喜久里 要 氏（文部科学省高等教育局）



特別講演1「アカデミック・ポートフォリオの基本理念」 土持ゲーリー法一 氏（帝京大学）



「新任教員研修でのティーチング・ポートフォリオの活用」 林 泰子 氏（立命館大学）



FDシンポジウム 総括討論

## (2) 平成24年度FDワークショップ

平成24年8月の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学～」を実践に移すための第一歩として、今回のワークショップは「能動的学修（アクティブ・ラーニング）の推進に向けて」が主題として据えられた（表15）。冒頭の講演で、学生の主体的な学修時間の実質的増加・確保や能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換の必要性が唱えられ、教員一人一人に教育内容と方法のさらなる工夫が求められる旨の説明がなされた。具体的な方策として、ディスカッションを含む双方向の授業への転換が考えられ、弘前大学医学部医学科におけるPBL（Problem-Based Learning）教育（平成13年より準備、平成15年4月授業開始）について説明がなされた。

表15. 平成24年度弘前大学秋期FDワークショップ（日帰り）

---

テーマ：能動的学修（アクティブ・ラーニング）の推進に向けて

## 【午前】

1. 講演「中教審答申を踏まえたアクティブ・ラーニングの推進」  
（中根明夫、教育担当理事）
2. 講演「PBLの概念と進め方」  
（中山留美子、三重大学高等教育創造開発センター）
3. PBL模擬授業－学生参加によりPBL授業を実施（鬼島 宏、医学研究科）

## 【昼食】

## 【午後】

4. グループ討議Ⅰ・発表－これまでの自己の授業の振り返り  
（司会：田中正弘、21世紀教育センター）
  5. グループ討議Ⅱ・発表－アクティブ・ラーニングを踏まえたシラバスの改善  
（司会：田中正弘、21世紀教育センター）
  6. 全体討議
- 

また、中山氏（三重大学）より「Active learnerを育てるPBL教育の特徴と進め方」の講義があり、PBL教育は、アクティブラーナー（能動的学習者）を育成するための有効な方法の1つであることが示された。PBL教育とは、学生の能動的学習を促進するために、問題解決が行われるプロセスに乗せて、効果的に学習内容を配置していく教育方法で、教員はプロセスがスムーズに進行し、学生に定着するよう、授業の構造を設計し、活動を促進する役割を担うことが大切である旨が説明された。次いで、学生の参加により、弘前大学医学部医学科で実施されているPBL授業の「模擬授業」が開講された。

その後、ワークショップ参加者がグループに分かれて4グループに分かれたグループ討議Ⅰ「これまでの自己の授業の振り返り」とその発表、およびグループ討議Ⅱ「アクティブ・ラーニングを踏まえたシラバスの改善」とその発表、さらにはこれらを踏まえた全体討議が行われた。



講演「PBLの概念と進め方」  
中山留美子 氏（三重大学）



FDワークショップ PBL 模擬授業  
(医学部医学科学生が参加)



FDワークショップ グループ討議



FDワークショップ グループ討議の発表

## 【考 察】

高等教育（大学における教育）に求められる重要な点は、学生の主体的な学びを確立し、「答えの出にくい問題」に直面した際、最善解を導くために必要な専門的知識及び汎用的能力を鍛えることといえる。このために大学は、従前のように「何をどう学ばせるか」ではなく、「学びをどう構成するか」を必須の要件として勘案し、さらには「個人の力量をどう最大限発揮させながら、役割分担を図りつつ、体系的な学びをどのように実現するか」といった観点で高等教育を行う必要がある。これに段階的に対応してゆくため、中教審答申などで、学部・学科毎の教育研究目的の明示（H20. 4～；大学院 H19～）、シラバス・成績評価基準の明示（H20. 4～）、FDの義務化（H20. 4～；大学院 H19～）が提示されてきた。この方策として、各大学でも（1）教育課程の体系化、（2）組織的な教育の実施、（3）授業計画（シラバス）、（4）教員の教育力向上、学生の学修環境の整備などを進めるための全学的な教学マネジメントの改善が行われ、弘前大学では「ティーチング・ポートフォリオを活用したFD活動の展開」を取り組み、「教育者総覧」が教員の高い入力率をもって結実した。

近年は、さらに就業力（＝大学が「社会に有為な人材を育成しているか」という観点から、教育の内容・成果を明らかにする取組や、教育情報の公表（＝大学教育をめぐる基本情報の積極的な公表を通じ、社会的責任の遂行と教育の質保証を図る）を行うことで、出口（大学卒業）保証を加速化させる

必要があることが強調されている。つまり大学は、授業内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施する一方で、教員中心の教育 (teacher-centered classroom) から、「自学自習テュートリアル」などの学生中心の教育 (learner-centered classroom) へ転換することで、学生に生涯教育 (life-long learning) を根付かせることが重要であり、これを実践するためには、教員と学生とが意思疎通を図りつつ、学生が相互に刺激を与えながら知的に成長する課題解決型の能動的学修を中心とした教育へと転換することが急務といえよう。Life-Long Learningの定着には、Active LearnerやLearning Portfolioに示される通り Learning は重要である。<sup>12)</sup> しかしながら、Teaching Portfolioに示されるような Teaching も極めて大切な要素であり、Learning/Teaching を表裏一体化した理想的な Student/Teacher Partnershipが構築されることにより、教員の学ぶ姿勢が学生に伝わり、Life-Long Learningが現実的なものとなろう。

## 文 献

- 1) 鬼島 宏, 木村宣美, Victor L. Carpenter, 土持ゲーリー法一. Teaching Portfolio (ティーチング・ポートフォリオ) と自己評価報告書 (教育活動) との対比. 21世紀フォーラム 2: 1-15, 2007 (弘前大学21世紀教育センター).
- 2) 土持ゲーリー法一. ティーチング・ポートフォリオの積極的導入 - 自己反省から授業改善へ-. 21世紀フォーラム 1: 1-12, 2006 (弘前大学21世紀教育センター).
- 3) O'Neil C, Wright A. Recording teaching accomplishment: A Dalhousie Guide to Teaching Dossier. 5th edition. Centre for Learning and Teaching, Dalhousie University, Halifax, Nova Scotia, Canada, 2004.
- 4) Centre for Learning and Teaching, Dalhousie University.  
ホームページ: <http://learningandteaching.dal.ca/>
- 5) 弘前大学教育者総覧 ホームページ: <http://www.hirosaki-u.ac.jp/edusoran/index.html>
- 6) POD Network/NCSPD ホームページ: <http://www.podnetwork.org/index.htm>
- 7) 鬼島 宏, 木村宣美, 大高明史, 土持ゲーリー法一, 須藤新一. 2008 POD Network/NCSPD カンファレンスでの成果. 21世紀フォーラム 4: 61-70, 2009 (弘前大学21世紀教育センター).
- 8) Seldin P, Miller JE. The Academic Portfolio: A Practical Guide to Documenting Teaching, Research, and Service. Jossey-Bass, San Francisco, CA, 2009.
- 9) Stuart J, Rutherford RJ. Medical student concentration during lectures. Lancet 2: 514-516, 1978.
- 10) SEDA ホームページ: <http://www.seda.ac.uk/home.html>
- 11) 鬼島 宏, Victor L. Carpenter, 大高明史, 土持ゲーリー法一, 須藤新一. 大学における学生・教員間のパートナーシップ構築をめざして. 21世紀フォーラム 5: 88-96, 2010 (弘前大学21世紀教育センター).
- 12) 土持ゲーリー法一. ティーチング・ポートフォリオとラーニング・ポートフォリオの可能性. 21世紀フォーラム 4: 1-10, 2009 (弘前大学21世紀教育センター).